
ギャルゲ好きの何が悪い

コクヨウ君

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ギャルゲ好きの何が悪い

【Nコード】

N6097X

【作者名】

コクヨウ君

【あらすじ】

特に強くない、そして人をキャラとしか見ていない、さらには弱虫なのに傲慢且つ外道、そんな主人公、カルマがいろんな勘違いをされつつもキャラを落としたり、コネで生き延びていく物語

一話目 転生フラグ

俺は今日、人生最大の過ちを犯してしまった。

いくら悔やんでも、悔やみきれない程の、大きな、大きな間違いだった。

もし、あの時
俺があいつを家までおくってやれば。

もし、あの時
俺があいつを突き放さなければ。

もし、あの時
俺が、あいつに少しでも、優しくしなければ…。

あいつは、

そんな後悔も虚しく。
猟奇的に殺害されたあいつの姿が、赤く、黒く染まる。

「な、んで、何でだよっ!!」

やり切れなさから、俺は手にあるものをベットに投げ付けた。

その投げ付けられたものには赤く

《～BadEnd8～》

の文字が。

俺の手にあるもの……それは二週間ほど前に発売したばかりのエロゲだった。

「チクショウ！　なんでサブEnd3がでないんだよ!?　こことら113周目なのに!」

全49End

BadEnd16、HappyEnd12、TrueEnd9、その他サブEnd12のオートセーブ式ゲーム。

エログロEnd～親友とのおホモ達Endまで、色々なニーズに応え多種多様なEndがある。

そして、発売二週間にして、今だクリアした人はいない。

「チクショウ、チクショウ、あそこでルートがかわったのか……ブツブツ……」

綿密にプレイした4時間をかえせ……

暫くブツブツと文句を言っていると、ぐぐつと腹が鳴る。

「……はぁ…気分転換にコンビニでも行こっかな…？」

……この言葉こそが、俺の人生最大の過ち。

コンビニに行きトラックに轢かれて転生フラグだった。

で、俺は死んだ、なのに何故か白い空間にいて、神様がいて“お前には転生してもらう”と？

「そうだ…」

どうやら神様は本当に心が読めるらしい。

ねえ神様

何で俺が死んだんだ？なんていう陳腐な質問していいかな、俺が知ってるパターンだと？神様の間違いでうっかり？神様の部下の間

違いでうつかり？運命とやらだった？俺がかつてに死んだ、なんだけど？

「？、私が故意に連れて来ただ」

ふうん…あたらしい選たく肢だね。

「お前には、異世界に転生してもらっ」

へえ異世界かあ、まん画の世かいかな？アニメの世かいかな？小説の世かいかな？

俺のまったく知らない世界？へい行せかい？鏡のなかの世かい？俺は人げんになるのかな？動物かな？しょく物かな？びせい物かな？むき物かな？

「お前の世界では漫画になっていた世界だ…残念だが、特典は最低限のお前の望みを叶えるだけだ、補正も何も無い
使命も理由も意義もなく、お前を転生させる」

いいよ、にじげんなんてもえるじゃないか。
それに、さいていげんだってねがいはかなうんでしょ？

ああ…なんだかここにいとあたまがボーッとする。
うまく考えがまとまらなくなってきた。

「そうか、まあ精々楽しんでくれ」

うん、せいっぱい楽しませてもらうよ。
こんなきはいはこのさきないだろうしね。

「ああ、じゃあな」

そのことばがきこえると、おれのめのまえがまっしろになってしまった。

まあ、もとからしろいのにしろになるなんてへんなはなしなんだけどさ。

しろくなったせいでかみさまもみえなくなつて、そしておれはなにもみえなくなつてめのまえはしろだけで、なにもきこえなくなつてどんどんあたまがぼーっとしてきて

こんなふうにかんがえごとをしているとこんがらがってきてしかもなんだかねむくなつてきたしおれはそれにさからえないし

おやすみ

二話目 こんにちはオタ充、そしてさらばオタ充（前書き）

基本的に勢いのみで書いてます

誤字、脱字、矛盾点の指摘

アドバイスなどしてくれるとありがたいです

二話目 こんにちはオタ充、そしてさらばオタ充

カルマⅡラクジエンドは平々凡々な人生を謳歌していた。

中肉中背の、決して醜くはない凡庸な顔立ち。

勉強もそれなりに出来、それと同様に運動もそれなりに出来た。

が、あくまでも普通に生きてきた彼は13才の頃、変革を迎えることとなった。

「今日さ、一緒にゲームとかしねえ？」

それなりに仲の良かった友人からの軽いお誘い。

しかし、これを機会に彼の新たな人生が始まった。

簡単に言うと、彼はゲームにハマったのだ。

それはもう、何かにとり憑かれたかのように。

青春を全てゲームに捧げ、気がつけば彼は23になっていた。

せめてもの救いが、彼の容姿が彼のお気に入りである某ギャルゲの主人公に似て、実年齢よりも幼く見え、且つ身嗜みだけはしっか

りとしていたことだけであつた。

だが、実は彼の人生は、彼の知らない所で危険に満ちていた。それは彼の人生の転機から6年後のことだった。

彼は、公式ギャルゲサイトの交流所で顔写真をさらした。最初は合成だ、整形だ、と騒がれ、次にモデルになった人物などと騒がれた。

尤も暫くすれば、そんなこともある、と落ち着いたが。

そのゲームの中で、一定の条件を満たすと、主人公の女装シーンがでるといふ物があつた。そしてそれ故に、彼に興味をもつたコアなファン達がいた。

彼はその人達と仲良くなった、彼等も、全くの下心もないとは言えないが、彼を友人だと思えていただろう。

彼等の中で最も年齢が低く、最も仲が良い少年とは、オンラインゲームをやってみたりもしていた。きっと少年も、純粹に彼のことを友人だと思っているだろう。

普通

これだけならば、彼の人生に危険があるだなんて思えない。精々、架空請求程度の危険だ。

その少年の名前が

ミルキ・ゾルディック

でさえなければ。

何故？ と、彼は思うだろう。

彼は今日、オフ会というものに初めて参加しようとしていた。

参加人数はそれ程多くはなく、5人程、内2人は彼の顔をさらした時からの、4年程の付き合いだった。

集合場所はザバン市の、とある町の噴水。集まっていたのは3人、来なかったのは彼と仲が良い少年だった。

事前の連絡もなく、俗に言うドタキャンであつたため、少しばかりの心配をしつつも初めてのオフ会を楽しんでいた。

自分の好きなゲームについて語り合い、自分の趣味を否定されない生身の人間に会え、ホクホクとした気持ちで彼は帰りのバスに乗っていた。

彼は油断していた、尤も、彼は一般人であり、気を張り詰めることなど殆どないに等しく、些か間違つた表現である気もするが。

彼は油断していたのだ。

まさか、そのバスに大量殺人犯が乗っているだなんて、思わずに。

バスには彼含め7名程が乗っていた。

黒髪にしががが目立ってきた無愛想な運転手、一番後ろの席を陣どる垂れ眉の髭をはやした男性、一緒のバス停で乗った彼の隣の席にいる十代の子供、イチヤイチヤしている後ろのほうに座っている男女、男女の二つ程前の席に座る初老の女性。

皆が皆、その場にいる者に興味がないわけではないのだ。

「きゃあああああ！！」

突然上がった悲鳴に、彼は後ろを振り返る。

そこには、赤く染まったモノがあった。グチャグチャと音を出してバラバラにされるのは、先程悲鳴を上げた女。

初老の女性はこれでもかと目を見開き、小刻みに震えている。

外を見ると、何時の間にかバスは止まっており、走って逃げる運転手の姿が見えた。

「あ………うつつ……」

噎せ返る程の、血の臭い。

初老の女性や、隣の席の子供のことなんか考えずに、泣きながら出口へ向かう。

「はあっ……う……う」

走って、走って、何度か躓き、ひたすらに逃げる。
相手は歩いている筈なのに、距離は狭まる一方だった。

「…っ!」

目の前には垂れ眉の、手が血に染まった男性。
不意に思い出す。

——被害者は100人ほど、ザバン市に住む方は十分にお気を付けてください。

ニュースレポーターの言っていた、最近よく聞く報道が、それ以外にも、何かが頭によぎる。

——解体屋ジョネス

——試験官

——大量殺人犯

——ハンターハンター

「うう…うあああ!」

唐突に、何か大切なことを、少しだけ、思い出した。
俺は…

「二次元のキャラを攻略するまで死ねない!」

何か、重さのない服を着た感覚がある。

——纏をすれば、威圧感を与えられるかも

纏？俺はそんなの知らない

「……！！………！」

訳がわからないまま、生きたいという思いを、すべて、ソレにそそぐ。

ジョネスは、悪態をつき、顔を歪め、立ち去った。
ソレをするだけ、ただそれだけで、俺の今世最大の危機が去った。

「は、はは、はははは！………うつあ………うええ………」

乾いた笑いと安心感、そして先程のバスの中の光景が目の前にうかぶ。

「うえっ………くう………」

纏とやらはいつの間にか解けていた、俺は泣きながら嘔吐し、地面にはいつくばる。

「ふうん、一瞬、殺すのかと思った………」

不意に聞こえてきた声。

そちらに顔をむけると、バスにいた、あの少年がいた。

「うん、これならまあいいかな、駄目なら今度殺そう」

少年の声は耳に入らないが、少年の顔には何故か見覚えがあった。
黒髪黒眼、猫のような顔立ち、無表情、幼いながらもあの顔立ちは

——ゾルディック。

何故？なんでこんな所に？どうしてだ？

頭がまわらない、痛い、頭が痛い、ゾルディックってなに？なんなの？

「？ 弱い？ どうしよう、やっぱり今殺そうかな？」

コテンと頭を横に傾げる少年。

殺す？ 誰を？

「……ねえ」

「ひっ……はい……」

話かけられる、頭には既に恐怖しかない。

「今死にたい？」

「……は……？」

わからない、何故俺に聞く、いや、俺は助かるのか？

俺からの返答にかた眉を少しあげ、ゆっくりと少年は近づいてくる。

「ひいっ！ ……し、死にたくないです！」

子供相手に、恥も見栄えも了見もなく、命乞いをする。

「…なら、いいや、精々強くなつてね」

少年は、何事もなかったかのように、一度も振り返らずに去って行く。

俺は、暫く気絶し、目覚めるとふらふらしながら帰路についた。

二話目 こんにちはオタ充、そしてさらばオタ充（後書き）

イルミとジョネス（と名前だけのミルキ）の登場

ご都合主義ですから、なるべく原作キャラに合わせたかったですよ

ジョネスは運悪く

イルミはミルキが友達に会いに行くと言い出したので、殺しに、み
たいな感じです

三話目　せんせー、念能力は最低限にはいりますかー？（前書き）

念能力を身につけます

今更ですが

友情、努力がないのに勝利を掴むのは嫌だ！と思う人は見ないほうがいいですね

三話目　せんせー、念能力は最低限にはいりますかー？

夢を見ている。

日本という豊かで安全な国に住み、怠惰の限りを尽くし、トラッ
クに轢かれ、神様に会う夢。

これは、俺の記憶。

前世で死に、使命も理由も意義なく、転生した俺の記憶。

そして次に見たのは、バスでの出来事。

……もう、怖くも何ともないな。

だって、此処は漫画の世界だ、そして俺は、その世界で暮らす一
人だった、だから怖かったんだ。

自分の世界が偽物だなんて、知らなかったからさ。

きっと今の俺なら、人だって戸惑いなく殺せるだろう。

此処は、漫画の世界、二次元の世界、偽物の世界。

この世界の人は、人ではない、この世界で俺だけが人なんだ、俺
だけが…。

夢の中、ゆつくりと、ゆつくりと、心を、俺自身を、騙していく。
そうしないと、俺は、きっとすぐに死んでしまうから。

全てを人としてではなく、キャラクターとして。

キャラクターとして、自分の、唯一の人間である俺の、思い通り
に。

俺自身でさえも、思い通りに動かせるように。

無茶でも、無謀でも、無鉄砲でもいい、そんな、能力を、俺の力を。

二次元を、手にする、唯一の、人間に、俺は、なりたいんだ。

フラグクラッシャー

落とし神の憂鬱

セーブポイント

憂鬱な日記

目覚めると、俺は発が使えるようになっていた。

そして、神様の「最低限」は信用できないということを学んだ。

三話目　せんせー、念能力は最低限にはいりますかー？（後書き）

「纏を知り、絶を覚え、練を経て、発に至る！！」

「発はなんか寝たら出来てた、基礎？なにそれおいしいの？」

「えっ？」

「えっ？」

「なにそれこわい」

こんな会話があったら面白い

四話目 親友？ むしろ心友

発が使えるようになっていた朝、俺のパソコンには一通のメールが届いていた。

贈り主は昨日のオフ会をドタキャンした少年。

要約すると、昨日来なかったことの謝罪と後日会って話をしたいということ、ついでに兄が迷惑かけたということ、何かの達人なのかと尋ねる内容だった。

…さすがの俺も馬鹿じゃないからね、昨日イルミに襲われたばかりで、兄が迷惑かけたなんて言われたら嫌でもわかる。

オタク＋ゾルディックの兄がいる＝イルキ・ゾルディックだってぐらいわかるよ。

でもさ、イルミは十代前半だったんだよ？ 逆算したら初めてネットで知り合った時、ミルキは六歳前後ってことになる。

一応、一緒にやってたゲーム、15禁なのにな……まあ、どうせ常時（グロ的な意味で）18禁の世界だしな。

ともかく、今一番重要なのは、少年あらためミルキが会いたいと書いてきてあることだ。

上手くいけば、念能力を使えるかもしれない。

此処でミルキ相手の親友フラグを立てておけば、後々（ゲームとかの）情報収集に役立つだろう。

それに、どうせイルミには俺のことがばれてるんだ、開き直るだけ開き直っておこう。

よし、そうと決まれば

「念能力の実験あんどミルキと心友大作戦」
ソウルメイト
決行だ！

……ネーミングセンスには深くツツコむなよ。

某日、ザバン市外のとある公園。

「えーっと…白色のベンチ……あ、あつた」

やっとミルキとの待ち合わせ場所についた、時間は…あと15分
ぐらいはあるだろう。

もう少し遅く来ればよかったかな？

「はあゝ、実質的には3人目の原作キャラか…」

解体屋に暗殺一家の兄弟か、キャラはキャラでももっと（社会的
に）まともな奴に遭遇したいね。

それにしても、原作かあ、その前に自分、生きてるかな？

はあ……、そういや今後のことも考えとかないなあ、個人で動
くには金がいるし。

金かあ…シビア過ぎるね。

大体、俺はどこぞのオリ主みたく、天空競技場で一儲けとかできないだろうしなあ……。

……いや待てよ？ 何も選手としてでなくとも、原作で勝った方にそれなりの額を賭ければよくないか？

元手も必要だが、イける気がするな。

んー、だがその元手をどうしようか。

借金もありだが、危ないグループから借りるとんでもないことになるだろう。

………そうだ！ 凝を使えるようになれば原作のゴン達みたいに値札競売市で掘り出しものを見つけれられる！

すごいなー、俺の人生薔薇色じゃん。

さすが俺？

「……あの」

「うはっ!？」

「え、あの、ラクジエ、さん、だよね？」

俺が未来に思いを馳せていると、急に誰かが話かけてきた。

そこにいたのは黒髪、黒眼＋猫目にデ、ゴホンゴホンふくよかな体つきをした少年だった。

「あ、間違った？ あ、う……」

ちなみに、ラクジエとは俺のファミリーネームである「ラクジエンド」からとったハンドルネームだ。

「間違っ てないよ？ ミクリ君、だよな？」

ミクリ、は相手のハンドルネームだ。

M I L U K I ↓ M I K U L I なのだろう、簡単なアナグラムだな。

「本名はミルキだよ」

「そう…俺はカルマだよ、よろしくね？」

「……うん……」

「……」

「……」

「……」

…… 会話が続かない。

なんでこんなに空気が重いんだ？

ミルキはこつちを凝視してくるし、何がしたいんだ？

「……昨日……」

「は？ え？」

ボソリと、聞こえないほど小さな声でミルキは何かを言った。

「昨日、イルミ兄が……」

ああ、そういえばそうだった。

暗殺一家と言えども、負い目の一つや二つ感じるんだな。

「イルミ君のことなら気にしないでいいよ、さすがにちょっと怖かったけど、ね」

子供に罪悪感をあたえるなんて、可哀相だ。

なんてコト、俺は言わない、今だって気にするなと言ったが「怖い」という一言は確実に、ミルキ傷口を抉ったはずだ。

きっと、俺はミルキにとっての初めての友達だ。

ゾルディックの人間にとって、友達の影響力は未知数だろう。

だって、友達がいないんだしさ。

俺も、何年かネット友やってたけど、ゲームの上達具合とか、子供故の我が儘な性格とか、のめり込み具合とか、ネットですら友達いなさそうな要素があるし。

俺の生れついで、魂に刻まれた日本人気質がなかったら友達じゃなかったらうね。

「ごめん……オレ、…初めての友達で………」

ゾルディックと言えども、所詮人の子、ましてや子供って感じ？まあ、俺だって可哀相なんて甘いことは言わないけど、子供をい

じめる趣味はないし。

「ほら、気にしないでよ？ 大丈夫だって、ね？」

「うん……」

「ほら、ハンカチ」

ハンカチを渡した時に、軽く手がふれる。
凝は出来ないけど、きつと垂れ流しのままの箸のソレに触る。

フラグクラッシャー

落とし神の憂鬱

「~~~~っ!!」

目に、何か得体の知れない違和感が襲う。

「え、どうしたの？」

「…、目に、ゴミが入っただけだよ…」

「…そう？大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

見える。

ミルキの右胸の辺りには、ピンク色で0、水色で460という数

字が。

だが、まだまだ、この能力はこれだけじゃない。
相手に、笑ってほしいと、笑顔になってほしいと念じてみる。

「そっかあ……」

ミルクが、安心したかのように、へにやっと笑った。

「……………」

取り敢えずは、成功って所かな？
さーて、次は。

セーブポイント

憂鬱な日記

鞆から本を取り出す、初めてだったがすんなり具現化できたな……。

本は…紺色の普通の日記帳みたいな外見だ。

「？ なにそれ？」

「ああ、ちょっとまっててくれないかな？ ごめんね」

中を開く……。

……履歴書のような内容だが、好きな食べ物とか、身長体重…座高まで、色々ある。

白いページが3枚、残り全部が灰色、多分白いページしか使えないのだろう。

本についていたペンでミルクィゾルディックと書く。

名前、性別、現在位置と好きな食べ物嫌いな食べ物、生年月日と出身地、がでた。

そして、俺への、一言……。

イルミ兄が認めた強い人、オレの初めての友達！

「…うん」

アレ？ 目から汗が…

「目が痛い…？」

「いや、大丈夫、………アイスでも奢るよ……」

「え！？ 本当に！？」

…ミルクィの頭の上に友情度20UPの文字がでていた。
本に目をやると…。

アイス奢ってくれる優しい人！！ という文字が。

「……不安だよ……」

激しく、お前の将来が。

ああ、そういえば実の弟にブタ君呼ばわりされたりするんだよね。

「はやく!!」

「……はいはい、アイスは逃げないからねー」

この後アイスを奢り、ゲームの話を直にして、10程友情度が上がった。

……さらに、何かの達人かとか、強いのかを聞かれ、苦笑いできずと嬉々としてゾルディックについてや、殺しについて語られたことも、嫌そうに拷問について聞かされ、80程友情度が上がったことについては細かくは言わないでおこう。

何はともあれ、それなりに楽しめた上に目的も果たせたんだ、俺としてはそれなりに有意義な時間だったと思えたよ。

四話目 親友？ むしろ心友（後書き）

ミルキ・ゾルディック

友情度：570

愛情度：0

友情度の基準は

グリードアイランド編のゴンとキルアで

1000前後ぐらい

愛情度の基準は

パームがゴンにベタ惚れの時

1000前後ぐらい

結構テキトーなので変更するかも知れません

ちなみに、数値はゲームではないので上限はありません
出るかどうかかわかりませんが、マイナスもあります
ゼロはそういった意味では無関心、ということですよ

数値については本当に適当なので、疑問点、アドバイス等がありましたら教えて下さい

五話目 マニアさんに出会った日

ミルキと出会った俺はその後、心を入れ替え念の修行と、基礎体力の向上に明け暮れている。

まあ嘘だけど。

ん？俺は毎日ゲームに明け暮れているよ。

理由は簡単、念の修行になるからだ。

今度は嘘ではない、ゲームをやることによって、より俺（主人公）の存在は強大で、絶対的なものだと思われているのだ。

念の修行はある意味、思い込みが一番大切だと俺は思っている。

…まあ、それでもある程度の基礎体力は必要だけど。

別に、俺に体力が全くない、というわけではないけどさ。

原作介入は俺にとっては最早決定事項。それなのに一次試験で脱落とか遠慮したいし、どうせならうかりたい。

ま、いざとなったらキルアみたいに移動用の道具の持ち込みをするだけけどさ。

……さてと、準備も終わったし、行くか。
ここ一月はずっと、家を、ザバン市を出る下準備に力を入れてきた。

クリアしたゲームは全て売り払い、両親からのお小遣ももらったおかげで、手元には30万J程がある。

そろそろ二ト生活も飽きてきたし、この念能力の性能をチエックもしないと駄目だしね。

こんな俺だって、少しの危機感ぐらいはもってる、筈だ。

ちなみに、多分家には二度と戻らないだろう。

まあ、此処まで育ててもらったせめてもの恩返しに、名前は使わせてもらうよ、ミルキに名乗っちゃったし、戸籍もあるしね。

でもファミリーネームだけはライセンスを取るまでだ、取ったら捨てよう。精神的にじゃまなんだよね。

ゴホンッ

それでは、この体のおとーさん、おかーさん、今まで育ててくれてありがとうございました。

もう二度と会うことはないでしょう、さようなら！

ザバン市から離れた、治安が良いとは言えないとある町。

ここは、訳ありで突然現れて、突然消える奴から前科持ち、足を洗ったが表に立てないような奴に地方マフィアや非行少年グループ、そんな危ないコトで溢れかえっている。

最近、俺は此所でアルバイトをしながら、来るかどうかもわからないチャンスを見計らっていた。

そして、そのチャンスはついに来た。

ターゲットは、小綺麗な格好をしたスタイルの良い、金色の髪に、遠目でもわかる程に整った顔をもった女。

事前に道ですれ違い、偶然を装い肩をぶつけ「落とし神の憂鬱」を発動させておいた。

そして今、そのターゲットが絡まれている。

絡んでいるのは此処一帯の元締めの下、だからみんな見て見ぬフリ。

女もそのことはわかっているようで、派手な抵抗もなく路地裏につれて行かれた。

「おー、キレイな顔してんなあ」

「だな、久しぶりにかなりの上玉だ」

「……」

「おいおい、怯えせんじゃねーよって」

「それがいいんじゃないか」

「だよな！」

「……」

女は腕に自信があったのだろう、敵が増えようと、4人程の男に囲まれながら、怯えることなく平然とした無表情だった。

……俺なんかも強いって、わかるのに、ああいう風に絡む馬鹿ってよく今まで生きてこれたな。

男達がにじり寄り、女が構えをとろうとした瞬間。

ガアッダアアン！！

ごみ箱を思いっ切り蹴る、まあ中が満杯だから倒れただけだけどころかなり大きな音がでた。

試合開始の合図、なんてね？

「！ 誰だ！」

その声に、俺は颯爽と……ではなく、少しびくびくしながら、男達にむかつて行く。

今回のコンセプトはやるときはやるヘタレ男だ。

こういう女って、自分より強い男しか好きにならない！ みたいなこと言うけど、実際自分がいなきゃ何も出来ないけど時々男前ぐらいのやつにコロツといくんだよね……ゲームだと。

「……っち！ 正義のヒーロー気取りか？ 残念だっただけぶっつっ！」

女が一番近くにいた、多分リーダーであろう男の鳩尾にグーパンチ。

俺は手下Bにフルボッコ^{デラ}されてる。

「おい！ つつ、調子のんなやクソアまぶらっ！！」

女が近づいてきた手下Cにローキック、体勢を崩した手下Cに容赦なくトドメの一撃。

俺は手下B（フンフン煩い）にフルボッコされてる。

「う、うわぁっ!!」

女、逃げようとした手下Aを横に蹴り飛ばす、膝をついたところで下顎を蹴り上げた。

俺は手下B（ニヤニヤ笑ってた、死ねよ）に最後の一撃をくらわれ、フルボッコ完了、手下Bは逃げようとして女に瞬殺された、ザマア。

「おい！ 大丈夫か!？」

さてと、本格的に攻略スタートか。
少しドキドキするな。

友情度20、愛情度6

「へっ？ あ、はい…」

なるべく怯えているように、何がおこったか解っていないように返事をする。

無防備に突っ込むなんて無謀、なんて言われるだろうなあ。

俺が小首をかしげながら返事をして、女の方へ振り向いた瞬間。

愛情度560UP

「…………え？」

「そんなにも可愛いらしいのに、私を助けるただけに彼奴等にむかって行ったのか！？　なんて健気で可愛いんだ！！」

「えー……………」

「いやいやいや、大丈夫だよ、多分この人は別に年下趣味とかじゃないから、可愛い（あ、自分で言っちゃった…）ものが好きなだけだから、第一、俺童顔だけど一応高校生ぐらいには見える筈だから。」

「くっ、しかし私は決して年下しかダメという訳では…………いや、この子だって成人はしている筈…いやしかし未成年だと言う場合も……………」

「ヤバイ、リアルな　まにあ　さんだ。」

「現実って、時々難易度ものすごく低くなるよね。」

「あ、この場合は　ただし年下に限ります　かな？」

「まあ、　まにあ　さんだとわかれば話は早い、ヘタレから庇護欲を掻き立てられる子にチェンジだ。」

「あ、…お姉ちゃん強いんだね……………」

幸いなことに、今世の容姿ならば多少子供っぽい口調でも違和感
はほとんどない。

……中の人の年齢が40過ぎとかは考えるなよ。

「（くっ、お姉ちゃんだとっ!？） ……私は大丈夫だ！ そんな
ことより、名前はなん……怪我はしてないか？」

愛情度60UP

「……僕はカルマって言い、ます……、怪我はちょっとだけ……
でも、なれてるから大丈夫です！」

全然なれてないけどね、普通に痛いよ。

「（なれている、か……） ……カルマか、私のことはベルと読んでく
れ、それに敬語は無しでいい……、そんなことより、何故こんな所
にいたんだ？ ここらは無法地帯だ、子供がいていい場所じゃない
……」

愛情度30UP

………本当、童顔に産んでくれた両親に感謝だよ。

上がり具合がやばい、可愛い同級生の女子に消しゴム拾って貰っ
た男子以上だ。

「僕、子供じゃない、よ！ お母さんも、お父さんも、お兄ちゃ
んも、皆いなくても、一人でも大丈夫なんだ！」

あ、ちなみに俺、前世も今世も一人っ子。

前世では妹みたいな幼なじみはいたけど、俺死んだし、関係ない

か。

「……自分を子供だと認められない奴は、まだまだ子供なんだよ」
そう言つて、ベルは俺を だ き し め た 。
位置的に……胸が……俺の顔に……

「カルマ、私と一緒に来ないか？ 一人は……寂しいだろう？」

……全く関係ない話だけど。

この町には非行少年グループがある、それに、なんでもそのグループは自分達を育ててくれた孤児院に、稼ぎの大半をまわしているらしい。

孤児院には、30人近い子供達がいて、一月に一人は増えて、一月に一人はどこかに消えるらしい。

なんでも、 まにあ の人に小さな可愛い子供は、多少汚らしくとも良く売れるらしい。

……非行少年グループのリーダーは、一月に一回ぐらい、黒服の男から泣きながら金を貰っているらしい。

皆、成人もしてない所か、売られるのは10歳にもならないガキらしい。

「僕、子供じゃない……でも、寂しいよお……」

「そうか……」

「……僕なんかが、一緒にいて……いいの？」

「ああ、もちろんだ」

そう言っ、ベルは俺と手を繋いで、今だに男達が倒れている薄汚い路地裏をでる。

…別に、咎める気はないし、強いて言うならただの戯言だけど、ベルは偽善者だね。

ま、なんかの漫画でもやらない善よりやる偽善、なんてあつたし、俺的には悪くはないんだけどさ。

こう、一応キチンとしたモラルを持っていた元日本人としては、目の前でやられると、まあ、ほら、胸のあたりが何かこう、モヤモヤするんだよね。

ましてやこっつてBad Endが溢れてる世界だし……あ、ヤバイ、くじけそう。

……俺には関係ない、うん。

どっかの誰かがルートを間違えてBad Endになろうが、関係ない、ていうか、むしろメシウマだし……。

大体、そうなる設定だったんだよ、俺の物語の輝きを引き立ててくれる影っていうやつ？

俺の物語に、一瞬でも出れたんだから、感謝してほしいぐらいだよ……。

「……どうした？ やっぱり、どこか痛いのか？」

「……うん、少しだけ、でも、大丈夫だから」

「……そうか……」

ベルの、俺の手を握る力が、少しだけ強くなった。

……痛くて、少しだけ泣きそうになった。

五話目 マニアさんに出会った日（後書き）

ベル

友情度：20

愛情度：716

出来るだけ原作キャラに負けないぐらい濃いオリキャラをつくらうとしたら、変な口調のシヨタコンになってしまいました
何を血迷ったのか最後は少しシリアス気味に書いてみたり

これからこんな感じで、勢いにまかせてやりたい放題やっていくつもりです

六話目 神様、俺はあなたが嫌いです

ベルの家に行くのには、それなりの時間がかかった。

その間、ベルがハンターライセンスを持っていることがわかり、移動中に愛情度、友情度ともにいくらかの上昇があったりもしたが、俺の正体（二十過ぎのニート）はばれなかった。

いくら俺が一般人でも、いや、一般人だからこそ、俺の嘘なんてネットで調べられればすぐにバレる、と思ったが杞憂に終わった。

が、そのかわりに、それ以上の問題があった。

本^{マジ}気でこんな偶然有り得ないよ。

例えるならパンをくわえて遅刻間際に走って登校したら美少女とぶつかって、美少女のパンツが見えるハプニングが起きて、その美少女に罵倒された後学校に行ったら美少女は実は転校生でしただてベタベタの展開が現実にかかるくらい有り得ない、そんな問題があった。

「流…星街……？」

「ああ、流星街だ、聞いたことくらいあるだろう？ 私はそこで育ったんだ」

本当、こんなの有り得ない。

「……………うん……………」

「…カルマが、嫌だと思つのならば、私は無理には連れていきはしない、あんな所に好き好んで行く奴なんていないから……」

愛情度600DW、友情度500DW

……ツチ。

まあ、流星街に属せば迂闊に手はだせないだろ……悪いことばかりでもない筈。

「…嫌じゃ、ないよ、僕も流星街に行く」

「ほ、本当か？ いいのか？」

「うん、だってベルの育つた街でしょ？ なら、平気」

愛情度500UP、友情度520UP

「そ、うか……滞在期間はかなり短い、それに、安全だけは確保する、だから安心してほしい」

安心なんかできないだろ、てか、本当に頭大丈夫かコイツ？
安全が欲しいのなら、危険に飛び込めなんて洗脳でもされてるんじゃないのかな？

確かに、流星街の住人なら、幻影旅団に殺されることもなくなるだろうし、報復を恐れて手だしもされないだろう。

有り難いけど、今までの、カルマ＝ラクジエンドの人生が全て否定され、なかったことにされる。

戸籍だってなくなるから、動きずらくなるだろうし。

前途多難だな。

「ならば、流星街に滞在する間、守るべきことを言っておくぞ」
いきなりかよ…

「うん」

「その一、盗みはいいが喝上げはなしだ、その二、殺生沙汰は勿論本気の喧嘩はするな、その三、大切な人をつくるな、以上だ」

…？ その一、その二はまあ置いておくとするが、その三はなんなんだ？

駄目元で聞いてみるか…

「大切な人をつくるなって、何で？」

「……そいつに何かあったら、駆り出されるからな……」

ああ、そういうことね。

報復するために自殺、てか自爆なんて確かに嫌だな、まだベルに常識的なところがあってよかったよ。

でも流石に、強制ではないだろうから大丈夫だろ、多分。

「？でも、ベルは僕にとっての大切な人だよ？」

愛情度30UP

「そうか……ありがとう」

若干泣きそうな顔で、俺の頭を撫でる。

……そういえば、ベルの歳っていくつだったんだろう？
俺よりは若い……のか？

十代後半〜二十代前半ってことはわかるけど……。

って、シリアスな場面で何考えてんだ俺。

「…改めて、名乗ろうカルマ、私はミラベルⅡルシルフル、ベル
と呼んでくれ」

……。

天罰ですか神様。

それとも、俺のことが実は嫌いなんですか…？

第一回 プロフィール公開

主人公

名前

カルマⅡラクジェンド

性別

男

系統

特質<具現化<操作

容姿

天パではないが、ストレートと呼べる程でもない茶髪に近い黒髪、前髪は目を隠すぐらいの長さ。

顔はこれといった特徴はなく、良くも悪くも中性的、化粧や動作に気をつけていれば美人になる程度には整っている。

黙っていれば16、7歳程度に見える。

身長は低め（160強）。

20代で死亡、転生

23歳の時に記憶がもどる

原作開始：29歳

念能力

「落とし神の憂鬱」（フラグクラッシャー）

- ・特質く操作

制約

- ・相手の顔を知る必要がある
- ・相手の念に触れる必要がある
- ・使っている間、強制的に「垂れ流し」の状態になり、「落とし神の憂鬱」と「憂鬱な日記」以外の念が使えなくなる

内容

- ・相手の自分に対しての友好度、愛情度が数値化されて見える
- ・感情の起伏をある程度操ることができる、あくまでそんな気にさせるだけなのでそれ程強くはない

「憂鬱な日記」（セーブポイント）

- ・具現化、特質

制約

- ・「落とし神の憂鬱」の発動中、相手の名前を具現化したノートに書きこむ必要がある

- ・名前は相手が本名だと思っているものを書く必要がある

内容

- ・登録人数はオーラ総量で決まる
- ・名字は書かなくとも使用できるが、その場合相手に「落とし神の憂鬱」による感情操作は出来なくなる
- ・相手の友好度、愛情度に比例してプロフィールがでる
- ・相手の現在位置がわかる
- ・相手からの自分に対しての一言がでる

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6097x/>

ギャルゲ好きの何が悪い

2011年11月8日17時15分発行